

2023年「4・13 根津山小さな追悼会」のご報告

4・13 根津山小さな追悼会は、お陰さまで今年で第30回を迎えます。

昨年2023(令和5)年第29回追悼会も、一昨昨年に引き続き通常の規模で開催することができました。式次第も、「花」斉唱を割愛させていただいた以外は、これまで通りの進行内容で開催いたしました。引き続き「参加はご無理をせず」と呼びかけて開催しましたが、参加者約90名の他、来賓、報道関係、当日の設営・受付スタッフ、実行委員を含めた総勢約130名が、空襲犠牲者を追悼し平和への祈りを捧げることができました。感謝申し上げます。

今後ともお力添え、ご参加くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

4・13 根津山小さな追悼会実行委員一同



花

4・13 根津山小さな追悼会 空襲学習会 開催！

＊参加無料

4・13 城北大空襲とは何であったか

どなたでも
参加できます

2024年4月26日(金)18:30(18:15 開場)

話す人：青木哲夫(当会実行委員、東京大空襲・戦災資料センター主任研究員)

会場：「IKE・Biz」第3会議室(6階)/豊島区西池袋2-37-4

【主な内容】・城北大空襲のあらまし・アメリカ軍の目的・城北大空襲の被害・対日空襲の歴史と城北大空襲・平和のために



【城北大空襲被災体験のご紹介】 藤本繁さん「チャップリンの靴」は、40代の終わり頃に作った備忘録、戦前から戦後の記録 36 ページの中から空襲前後を抜粋し掲載しました。限られた紙面のため、改行などは最小限にさせていただきました。一緒にお送りくださった三兄 藤本忠男さん「子どもの頃のこと」は、公立学校法人横浜市立大学医学部・有美会の年刊誌『有美』第 35 号 (2006 年 4 月 15 日) 掲載の文章に、読む方のためにももう少し詳しくと忠男さんご自身が書き込んだものを原稿として掲載しました。

チャップリンの靴

藤本 繁 (熊谷市中奈良在住)

防空頭巾

学校から帰ってくるとランドセルは非常持ち出し袋にチェンジする。寝る時は洋服や持ち出し用は枕元に置いて寝る習慣だった。その夜は空襲警報もならないうちに、「空襲だー」という声に起こされた。洋服を着る。ランドセルを持つ。防空頭巾をかぶる――無い！防空頭巾が無い！（今、考えると床の間の奥、ランドセルの向こう側にあった筈なのだが。）なにしろ一刻も早く外にでなければならぬ。気はあせるばかりで探す物はみつからない。

「早くしろ。これを使え。」と貸してくれたのは、善一郎兄の黒い大きな防空頭巾だった。私のは紺色のチェックの頭巾だった。当時は誰でもそうであったが、学校に行く時も外に遊びに行く時も、防空頭巾は必ず持って外出することになっていた。

長靴

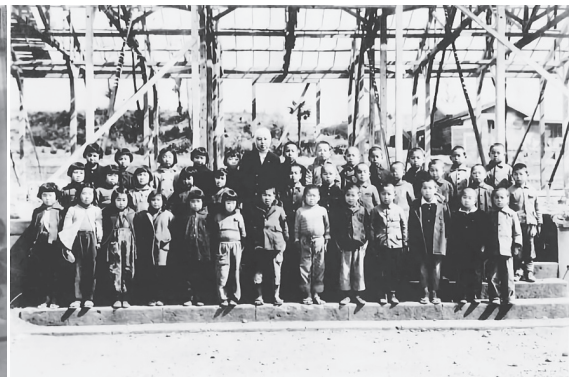
空襲で逃げる時は長靴と決めていた。ところが、今度は長靴が片方みつからない。しかたがないので、片方は長靴、片方はわらじで防空壕に逃げ込んだ。防空壕は家のすぐ前の道路下に掘ってあった。



▲焼け跡から掘り出された貯金箱。南大塚の姉 (90 才) が最近まで保管。豊島区郷土資料館に寄贈。



▲上田市金昌寺の疎開児童。前列が空襲後疎開することになった 1～2 年生。後ろは 6 年生、前列左から 4 人目が私。



▲戦後の焼け跡に建築中の巣鴨小学校。

(写真 4 点は藤本繁さん提供)

逃げる

しばらく防空壕にいたが、その上をぞろぞろと逃げる人々が通り過ぎた。「壕にはいついては危ないぞ！」と言う声で、逃げることにした。再び家の中に戻ると、今度はすぐに長靴が見つかった。近くまで火事がきていたので、家の中が明るかったからだ。

火の海

昭和 20 年 4 月 13 日。私は 7 才。妹の裕子は 5 才。姉米子が 12 才。忠男兄 10 才は長野に疎開していた。

妹は回りをすっかり火に囲まれて、おじけついてしまい、歩くことが出来ない。お袋は兵児帯で妹を背負った。私はリヤカーに積んだ布団に顔をぴったりとつけて、リヤカーに引きずられて歩いた。

時折顔をあげるとそこは火の海。地面を火が走り、道路の上空を火が横断した。

東京パンのビルも火につつまれていた。白木屋の窓から赤い火が吹いていた。

永田精機

火に囲まれて逃げ場を失い、逃げ込んだ所がメリヤス工場の永田精機だった。「中に火が入ったらおしまいだから、覚悟しておおき。」とお袋は言った。関東大震災に前例がある。中庭にあった小さな小屋に

火がついたが、皆で消しとめた。そして幸いなことに中に逃げ込んだ人達は皆無事だった。

(その後) 東京パンは山海楼に、白木屋は住友銀行に、永田精機はスーパーマーケットになっている。

ばけつ

折戸通りを北に歩いた。お袋は瀬戸物をいれたバケツを背中にかついでいた。倒れた黒焦げの電信柱や電線をまたいだり、くぐったりするたびに、バケツから瀬戸物がこぼれおちた。黒焦げの焼死体の横を無造作に通るすぎたりもした。

長唄のおしょさん

避難場所だと言われて、焼野原の中をやっとたどりついたのは、巣鴨女子高であった。ところが、「ここではない。豊島第二だ。」といわれて、お袋はがっかりきて、門の前にしゃがみこんだ。向こう側におなじように座りこんでいる二人の婦人がいた。ペンキ屋の隣に住んでいた長唄のお師匠さんたちだった。

布袋様

自分の家の焼け跡に行った。黒く焦げた米。一年の時に隣の子からもらった鍬。神棚にあった布袋様の貯金箱などを拾った。

大塚の神棚に今も置いてある布袋様がそれである。

防空壕の家

井戸があったからここにしたのだ、と親父がいていた。縦に穴を掘って、トタンで屋根を葺いた防空壕の家に移り住んだ。そこが現在地である。

後に、疎開させていた筆筒もこの防空壕の家に入った。今、大塚の三帖間にあるのがそれである。防空壕の湿気で一番上の小さな開き戸が駄目になった。



◀ 新築の巣鴨小学校。後ろには焼夷弾に直撃されてひしゃげたジャンゲルジム。

日の丸

昭和 20 年 5 月 1 日。この日、防空の入口に日の丸が立てられた。立体物など何一つ見当たらない焼野原の中で、それは目にも鮮やかな感動的なシーンであった。親父は後々までこの事を話していた。

三年生以上でなければ、学童疎開に行かれないことになっていたが、空襲のため一年生まで引き下げられて私も疎開することになった、その出発の朝のことであった。

被災当時：7歳・仰高西国民学校／豊島区巣鴨

子どもの頃のこと

藤本忠男（横浜市港北区在住）

一九四一年（昭和十六年）、その年から仰高西小学校が国民学校という名称に変わり、国民学校に入学しました。その十二月に日本はアジア太平洋戦争に突入して行きます。そして敗戦のときに五年生。焼け跡の校庭で、仰高西・仰高北合同の卒業式がありました。母や他のお母さんたちがおにぎりを作ってお祝いしてくれました。

その次ぎの学年からまた元の小学校という名称に戻りました。ですから「私は小学校に行っていません。」と言っています。

東京は豊島区南大塚に住んでいましたから、アメリカ軍の東京大空襲が激しくなった四年生の頃には、ほとんどの生徒が地方に疎開して行きました。

毎日のようにラジオ放送やサイレンで空襲警報が出され、成層圏を飛んでくる巨大な B 二十九爆撃機の大軍と、それを援護するロッキードの戦闘機に、そこまで届かない日本軍のサーチライトの光と、下の方で炸裂する高射砲の爆弾の音を聞きながら、役にも立たない家の縁の下の防空壕の中でちぢこまっていました。

このような状況の中で両親は兄弟六人のうち、すでに信州の旅館（青木村田沢温泉富士屋）に集団で避難疎開している学校へ私だけを送り、その間の空襲で家は全焼しました。両親（照一郎・キセ）と兄弟五人（善一郎・善司・米子・繁・裕子、いちばん下は幼児でしたが）はリヤカーに僅かな家財を積んで炎の中を逃げまどい、どうやら全員助かりました。

二台のうち一台のリヤカーは火がついて放置したそうです。その後、繁は上田市金昌寺に疎開しました。

敗戦直後に帰ってきた大塚の町は見渡すかぎりの焼け野原。家族は家の近くに大きな防空壕を見つけて焼けトタン板をかぶせた中で暮らしていました。住んだ所は巢鴨七丁目 1820 番代。

家からわりと近いところに巢鴨拘置所があり（今の池袋サンシャインシティビル）、いわゆる A 級戦犯が収容されていました。アメリカ軍の残飯を求めて拘置所の周囲には大勢の子供たちが群がりました。

食べるものがないので兄や姉は超満員の汽車に乗って農村へ出かけ、貴重な家財と交換にさつま芋

などをもって来ましたが、途中で巡査に見つかり没収されたこともあり。私も父と一緒に買い出しに出かけ、農家でさんざん頭を下げ、超満員の汽車のトイレの窓からようやく押し込まれて帰ってきたこともあります。

あれから何十年？ 日本からこういう姿が消えましたが、世界各地で同じような状況が今でもあるのと思うと心が痛みます。国やおとなたちの利害から起こす戦争にどれだけ子供たちの心が傷つけられていることかー

被災当時：11 歳／豊島区巢鴨

豊島区ミュージカル 学習会のご報告

豊島区の劇団ムジカフォンテが主催する「豊島区ミュージカル」は、2013 年より毎年豊島区の文化と歴史をテーマにミュージカルを創作・公演しています。今年 3 月の公演では戦中・戦後の物語「IKEBUKURO EASTSIDE STORY」を演じるために豊島区を襲った空襲や根津山で起こったことを学びたいと学習会の機会をいただきました。

学習会は稽古場となる池袋本町第二区民集会室で 2024 年 2 月 18 日（日）18 時より、小学生から大人まで出演者約 20 人を対象に行われました。

最初に実行委員副代表が「根津山や 4 月 13 日の空襲について、追悼会について」お話しし、次に地元協力者朝倉さんと実行委員の 3 人で『城北

大空襲被災証言集』3 冊から根津山に関係する 6 人の被災体験を朗読しました。劇団の知久代表が時間を延長して出演者の感想や発言を引き出し、稽古場に展示した資料を見ながら交流できる時間を設けてくださり、会場は皆が入り混じって交流し大変盛況でした。今に繋がるかつての出来事をきちんと伝えることの大切さと共に、伝える方法はもっとあるのではないかと実感できました。

会場展示：豊島区空襲被災地図、根津山の変遷
戦前・戦中・戦後 (A3×7.5 枚 / 絵：矢島勝昭)、
被災証言集第 2 集・第 3 集

(4・13 根津山小さな追悼会 学習会メンバー)

城北大空襲被災体験を語り継ぐ 4・13 根津山小さな追悼会 被災証言集



被災証言集第 2 集

2014/3/25・B5 版・本文モノクロ・114 頁・被災体験者証言地域図付
〈31 名の空襲被災証言地域：雑司ヶ谷町・目白町・池袋・要町・日ノ出町・西巢鴨・巢鴨・駒込、隣接地域(板橋区弥生町)〉 ●論文寄稿
「城北大空襲とは何であったか？」
青木哲夫

* 発行実費 1000 円のご寄付をお願いします

4・13 根津山小さな追悼会実行委員会



被災証言集第 3 集

2018/3/25・B5 版・本文モノクロ・132 頁・被災体験者証言地域図付
〈38 名の被災証言地域：池袋・雑司ヶ谷・目白町・高田本町・椎名町・長崎堀之内町・西巢鴨・巢鴨、近隣区の四月一三日・五月二五日空襲、豊島区外の空襲・学童疎開・勤労働員など〉 ●論文寄稿「豊島区の学童疎開」
青木哲夫

* 発行実費 1500 円のご寄付をお願いします

4・13 根津山小さな追悼会実行委員会